

成城の街の「おやじ仲間」

田嶋 信雄

南烏山から成城の街に引越してきたのは、下の娘が生まれた年だから、いまから十五年前のことである。引越し先として特に成城にこだわる理由はなかった。当時青山に勤め先があった妻には、港区に引越すことで、通勤時間を短縮し、その時間を家事・育児に充てるという選択肢もなくはなかった。が、港区は緑も少なく、子育て環境にも難点があるように思われた。そこで、妻が毎日往復二時間弱の通勤時間を甘受するのと引き替えに、職住一致の私が保育園の送り迎えや夕食の準備などを担当することで、成城の地に落ち着くことになったのである。祖師谷公園の近くにある保育園への送り迎えは、まあそれなりに大変であった。月曜日には家で洗濯しておいた布団カバーを娘たちの昼寝用の布団に装着しなければ

ならない。これが毎週である。お盆を除き、夏休みもない。朝八時の送りはともかく、夕方六時までの迎えのやりくりには苦労した。だが、これには予期せぬ付随効果もあった。毎朝挨拶を交わし、夕方には「井戸端会議」をする子育て仲間ができたのである。

上の娘が成城九丁目にある千歳小学校に上がると、今度は学童保育が始まった。学童保育とは、共働き家庭ないし一人親家庭など「保育に欠ける」(何という法律用語だ)児童に放課後の生活を保障する施策である。上の娘が二年生の時、ひよんなことから学童保育の父母会の会長就任を受諾した。ほかに引き受ける人がいなかったのである。

学童保育では、父母会の役割が重要である。「第二の生活の場」に親が関わることで、子どもたちも安心して学童保育に通うことができ、親たちも安心して働くことができる。四月の新入生歓迎会、七月のデイキャンプ、十一月の祖師谷公園でのトライアングル・フェスタ(祖師谷留学生会館、上祖師谷ばる児童館、千歳小学校が合同で開催する地域のお祭り)、十二月のクリスマス会、一月の餅つき大会、三月の進級お祝い会など様々な行事を行なう。また、九月には世田谷区への予算要望書をま

とめ、三月には父母会総会の資料を作る。そこでも多くの「おやじ仲間」ができて、なんだかんだと理由をつけては成城の街などによく飲みに行った。

公立小学校が完全週休二日制になり、教員の土曜日出勤が少なくなると、小学校の保護者会はウィークデーの昼間に開かれるようになった。このため、仕事を持つ私の妻は、保護者会に出席することができなくなった。「男親も子育てに参加すべきだというなら、保護者会やPTAの会合は土曜日に開くべきである」と校長にもPTA会長にも要望したが、かなえられなかった。いまでも、PTAの会合は、土曜日か、ウィークデーの夜に開かれるべきであると思っている。

仕方なく、私がよく保護者会などの学校行事に参加した。ウィークデーだから男親の参加はほとんどなく、おしゃべり好きな母親たちの間でしばしば肩身の狭い思いをした。ただし、そのため、子どもの母親たちとは随分面識ができ、今でも成城のスーパーなどに行くと、しばしばいろいろな人に挨拶される。

そういうわけで、学童保育の父母会長だけではなく、PTAの役員なども引き受けざるを得なかった。広報委員(二回、うち一回は委員長)、校外委員長(一回)な

どが回ってきた。このうち、広報委員は学校新聞を年に三回出すのが主たる仕事である。取材や発行手続きの調整のため、教職員と話をしなければならぬ。これぞいぶん千歳小学校の先生たちと懇意になり、やはりよく飲みに行った。また、校外委員会とは、登校・下校時や長期休業時の児童の安全確保が主な活動内容である。その委員長をすることにより、成城七丁目、八丁目、九丁目の街については、細かいところまで結構目配りをするようになった。

ただし、念のため言い訳がましく述べておけば、大学の講義を休講にすることはなかったが、たしかにこうした活動で昼間に研究活動を犠牲にせざるを得ない面はあった。しかし、そのため、削られた研究時間を夜に回すなどのやりくりをした。しばしば夕食後に自転車で大学に戻り、十一時頃まで研究室に籠もり、論文を書き、授業の準備をする。これは、今でも続く私の生活習慣である。

そのうち、PTA会長をしてくれ、という話が来た。が、さすがにこれは断った。この間の活動により、PTA会長というのは、ほとんど毎日のように学校に顔を出さなければならぬ、ということを知っていたからであ

成城教育

第144号

2009年6月30日

特集 わが街 成城



成城学園教育研究所

る。

世田谷区における学童保育父母会のゆるやかな連絡組織として、「世田谷区学童保育クラブ父母会連絡会」（略称世田谷父母連）という団体がある。二〇〇二年から五年間、この団体の会長・副会長を務める仕儀となった。そのため、「おやし仲間」は成城から世田谷中に広がった。特に、近隣の小学校（明正、砧、砧南、塚戸、山野、喜多見）の父母会のおやし達とはよく議論し、よく飲んだ。

学童保育関係者の東京都レヴェルでの連絡機関として「東京都学童保育連絡協議会」（略称都連協）があり、世田谷父母連も加盟している。この組織は、毎年一回、各区の持ち回りで、学童保育に関する研究会を開催しているが、二〇〇六年は世田谷区の、すなわち世田谷父母連の担当であった。そこで、成城大学の五号館と七号館を借りて研究会を開催することにした。全都から五〇〇人の父母や学童保育指導員の参加を得て、盛大に研究会を行うことができた。このときは、千歳小学校、明正小学校など成城の街の小学校を中心としたおやし仲間が縁の下の力持ちを演じてくれた。

おやし仲間であれしいのは、いろいろな職業の人がいるということである。水道屋のおやしもあるし、プロの

ミュージシャンもいる。保険屋さんもいるし、美容院をやっているママもいる。原発関係の会社に勤める研究者もいるし、中央官庁のキャリアもいる。大学教授の友人もいるが、所属は私と異なり、文学部や外国語学部だったりする。ふつうの会社員だが、毎日曜日に関東各地のマラソン大会に出ることを趣味としている人もいる。

こうしたおやし仲間とのつきあいは、狭い専門分野のことしか知らない私の視野を拡げてくれる。また、障害を持つ児童の親もいて、さまざま話を聞くこともある。そのような経験は、私にとって貴重である。そして、実は、成城学園に勤める教職員も何人かいる。こうした成城学園の同僚とは、職域を越えて話ができるのがうれしい。

いま娘たちは高校三年生と中学三年生だが、かつての学童保育のおやし仲間とは今でも成城や祖師ヶ谷大蔵の飲み屋で飲んでいる。私にとっては、成城の街における大切な時間である。ただし、娘たちが成長してほかの街の中学・高校に進み、千歳小学校や学童保育との縁が薄くなるにつれ、親同士のつきあひも徐々に減っていく。やむを得ないことではあるが、やはり少し寂しい。

（たじま のぶお・法学部）